

平成27年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員旅費）報告

20th Annual Congress of the European College of Sport Science (ECSS Malmo 2015) における研究発表

中谷 深友紀*

■はじめに

平成27年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員等旅費）の助成により、平成27年6月24日から6月27日までの日程で、スウェーデンのマルメにて開催された20th Annual Congress of the European College of Sport Science（第20回ヨーロッパスポーツ科学学会：以下、ECSSと略す）に参加し、我々がこれまでに行ってきた研究成果の一部を発表する機会を頂いた。本稿では、学会大会の様子および筆者の発表内容について報告する。

■ ECSS について

当学会は、1995年にヨーロッパにおけるスポーツ科学のレベル向上およびスポーツに関する科学的な知識の普及を目的とした国際組織である。また、会員および年一回開催されるAnnual Congressの参加者は年々増加し続けており、現在では3000名弱の会員数を擁している。当学会のAnnual Congressは、体力・スポーツ医科学分野では世界規模の学会の一つであり、ヨーロッパを拠点とする学会であるにも関わらず、毎年、アメリカ、アジア、オセアニアなど世界中から、スポーツ科学領域の研究者が集い、研究成果の発表および討論が盛んに行なわれている。今回参加した第20回ECSS学会においても、70か国から約2400名の参加があり、学会会場はスポーツ科学を研究領域とする研究者や学生をはじめ、運動指導および実践者等の参加者で非常に盛況であった。本学会大会は、著名な研究者による「Plenary Session」、 「Invited symposia」などの講演・

シンポジウムや、「Oral presentation」、 「Mini-oral presentation」、 「E-poster」の一般発表、協賛企業によるフロアでの実践や体験コーナー等のプログラムが、会期中、7：00から20：30まで行なわれていた。当学会には、日本国内の研究者・大学院生も多く参加しており、研究に関する話はもちろんのこと、語学力の向上に対する取り組みなども情報交換することができ、非常に実り多きものであった。本年が初の開催となった「1st ECSS Bengt Saltin Run 2015」にも参加し、公園の外周を2周（5.4km）した。その間にも学会参加者や現地の人々ともスポーツを通して交流することができた。



(写真1) 1st ECSS Bengt Saltin Run 2015の様子(筆者右)

■研究発表の概要

筆者は、学会大会初日、Mini-oral presentationにて「Applicability of ultrasound muscle thickness measurements for predicting quadriceps femoris

* 鹿屋体育大学 大学院体育学研究科 博士後期課程1年

muscle volume in middle-aged and elderly population」
というタイトルで、中高齢者における大腿部中央
の筋厚に基づく大腿四頭筋の筋体積の推定精度に
関する研究成果を発表した。骨格筋量を筋群別に
推定する方法として、超音波法による筋厚の測定
値に基づく筋体積推定式が提示されているが、そ
れらは若齢男性のデータから得られたものであり、
女性を含む高齢者に対する適用の可能性は不明
である。筆者は、その点を明らかにするために、
中高齢男女を対象にした分析結果に基づき、若
齢男性のデータに基づく先行研究の推定式の妥当
性の検証および中高齢者独自の筋体積推定式の
作成を試みた。その結果、先行研究において報
告されている若齢男性の推定式は、中高齢男女
の筋体積推定には適用できないこと、中高齢者
のデータに基づき作成した推定式は、実測値と
の間に有意な差を生まず、また推定値の誤差に
筋体積の大きさに依存した系統誤差を生じない
ことを明らかにした。さらに、MRIの分析結果
に基づき、大腿四頭筋の形状における性差およ
び年齢差も検証した。それら一連の成果は、こ
れまでに例のないものであり、筆者自身、独
創性の高いものであると考えている。

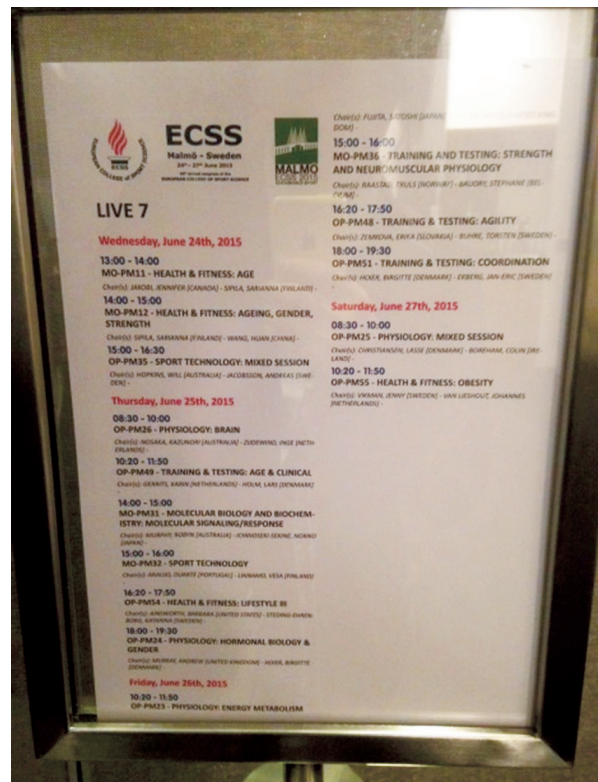
世界各国から体力・スポーツ医科学分野の研
究者が集う当学会大会において、研究の成果を
発表したことは、本研究の独自性・意義につい
て国際的評価を受ける良い機会であった。また、
学会大会でのプレゼンテーションおよび質疑応
答を通して、国際的に活躍している様々な分
野の研究者と議論を交わすことができ、今後
の研究活動をより充実したものへと発展させ
る糧となった。

■おわりに

国際学会に限らず、学会におけるプレゼン
は、筆者にとって初めての経験であった。それ
ゆえ、傍目には無謀なチャレンジと映ったか
も知れない。しかし、今回の国際学会での発
表を通して、自身の研究内容に対する理解を
より深めることができたと同時に、次の研
究のステップに向けて多

くのヒントを得た。今回の国際学会での
プレゼンテーションの経験を活かし、自身
の研究活動をより実りのあるものにする
よう、より一層努力したい。

最後に、本学会大会への参加・発表を行
なうにあたり、ご理解と多大なるご支援
をいただきました。本学教職員および共
同研究者の皆様様に深謝いたします。



(写真2) 筆者発表時のタイムスケジュール